

難波と飛鳥、ふたつの都は土器からどう見えるか

佐藤 隆

要旨 本論では、難波地域と飛鳥地域における土器の編年研究について現時点の成果を紹介した後、それぞれの土器の並行関係を詳細に検討し、暦年代を推定した。その結果、各々の段階ではどちらの地域の土器が質・量の面で優っているか、それがどのように推移するのかを明らかにすることができた。難波地域では7世紀第3四半期に良好な多くの資料が得られており、人々の活動が盛んで、宮域より外側へも開発が進んでいる。一方、同時期の飛鳥地域は良好な資料が少なく、7世紀第2四半期とは異なって低調に見える。反対に、7世紀第4四半期には難波地域では宮域周辺の土器が激減し、飛鳥地域では急激に土器が増えていく。こうした両地域の土器に見える流れによって、人々の動きが最も活発なところ―すなわち政治の中心―の変動が示されるとすれば、『日本書紀』が記す内容とは異なる歴史的事実の存在を認識する大きな手がかりとなる。

はじめに

“前期難波宮は孝徳朝の難波長柄豊碕宮なのか、それとも天武朝なのか？”

難波地域を調査・研究のフィールドとする者にとって、この問題は長い年月にわたっての課題であった。さまざまな側面から議論が重ねられるなかで、決定的な手がかりとなるのが土器の年代観であることは、もはや動かせない事実であろう。筆者は先学の成果をうけて、難波地域における5世紀から9世紀初頭にいたる土器の変遷を考え〔佐藤2000・2014〕、前期難波宮が7世紀中頃の造営であることを再確認した。こうした宮殿の造営を『日本書紀』の記事に求めるならば、難波長柄豊碕宮が最も整合的である、という立場である。

一方、同じように宮殿の比定を考える立場であっても、前期難波宮の整地層の下位から出土した遺物を白雉3年（652）以前のものとする考えに筆者は同意しない。たとえ「造宮已訖。其宮殿之状不可殫論。」という言葉で飾られていたとしても、何がどこまで完成したのかは記事からは窺いえないし、広大な宮域のすべてが整えられたのかは証明できないと考えるからである。そうした“652年”にとられる考え方は難波長柄豊碕宮説に懐疑的な立場にもしばしば見受けられる。整地層の土器の年代が652年より新しくなる余地が少しでもあれば否定できると考え、そこから一足飛びに天武朝説へ結び付ける場合もある。

これらはいずれも『日本書紀』の記事を絶対視し、考古学的成果をその枠内へ押し込もうとする考え方である。しかし、考古資料が語る事実は必ずしも『日本書紀』の物語世界とは一致しないこともある。たとえば、白雉4年（653）には中大兄皇子が飛鳥へ“還都”して、翌白雉5年（654）に孝徳天皇が失意のなかで亡くなった後、難波宮は歴史の表舞台からはほとんど消えたようになるが、実際

は宮殿造営期以後の土器もかなり出土していて、整地によって開発される範囲も広がっている。それに対して、同時期の飛鳥はどうか？

本論はこうした視点に基づいて、難波地域と飛鳥地域¹における土器資料の出土実態を比較し、そこから見えてくることについて検討したい。『日本書紀』が語らなかった歴史的事実がきっと存在するに違いないのである。

1. 7世紀における難波と飛鳥の土器資料

1) 難波地域

難波地域の土器編年は、当初は難波宮下層遺跡から前期難波宮造営までの年代を検討することを主たる目的として行なわれてきた〔中尾1965・京嶋1994・南1992など〕。その後、筆者は先学の成果をうけつつ、5世紀から9世紀初頭までの資料を対象を広げて、難波Ⅰ～Ⅴの編年案を提示した（以下、難波編年とする 図1）〔佐藤2000・2014〕。本論で飛鳥地域の編年（以下、飛鳥編年とする）と比較する時期は難波Ⅲ～Ⅳに当たる。まずはそれらの概要を示し、代表的な土器資料を挙げていこう。

難波Ⅲ 法円坂の大型倉庫群に代表される5世紀の遺構群（難波Ⅰ）が廃絶した後、集落（難波宮下層遺跡）が営まれ始めた難波Ⅱに続いて、集落における建物数の増加や規模の拡大が見られ、四天王寺の造営やそれに続く前期難波宮の造営など、上町台地を中心とした人々の動きが活発となる時期である。土器もそれに合せて大きく変化する。土師器では丸みをもつ底部から体部・口縁部が内彎しながらのびる杯（奈良文化財研究所分類の杯C、以下同様）などの暗文を施す精製の食器類やハケ調整の煮炊具が主体となり、須恵器では古墳時代以来の伝統を引く蓋杯（杯H）に加えてつまみをもつ蓋を伴う杯Gや底部に高台の付いた杯Bが現れる。土師器は杯Cの法量の変化、須恵器は杯Hと新たな器形である杯Gの比率およびそれらの法量の変化をおもな指標として、古～新段階に細分する。

古段階は、土師器では定型化した精製の杯Cが主体となり、煮炊具にはナデ・ユビオサエで調整する「難波型」〔京嶋1989・2015〕と呼ばれる土器がまだ残る。須恵器の食器類は杯Hが大半で、杯Gはまだわずかである。この段階の代表例には、難波宮跡NW第66次方形土壙（「NW」は「難波宮跡」の略称、以下の他遺跡も同様）〔難波宮址顕彰会1976・京嶋1994〕、NW08-3次谷第8-4層（「08-」は2008年度の略称、以下も同様）〔大市協2010〕の資料がある。NW90-7次谷第8a層〔大市協2004〕もこの段階に含まれる。これらは前期難波宮造営前の資料で、後に難波宮が造営される地域のうち、北側では薄く、南側に資料が多く分布する傾向がある。四天王寺の創建瓦を焼いた楠葉平野山窯の須恵器の大部分がこの段階に当たり、同寺の造営年代を示している〔佐藤1999〕。

中段階は、定型化した精製の土師器に皿が加わり、煮炊具はハケ調整のものが主体となる。須恵器の食器類では杯Gが多くなるものの杯Hの比率がまだ大きい。この段階の代表例には、難波宮下層遺跡の最末期の資料であるNW第100次土坑SK10043〔大市協1981〕、NW88-1次土坑SK219²・218・223〔大市協1992〕などや、前期難波宮の造営期に埋め立てられた谷埋土の資料であるNW90-7次第7b2・1層〔大市協2004〕、NW97-3次水利施設第7層〔大市協2000〕の資料などが挙げられる。この段階に集落が廃絶し、前期難波宮が造営されたことは明らかである³。

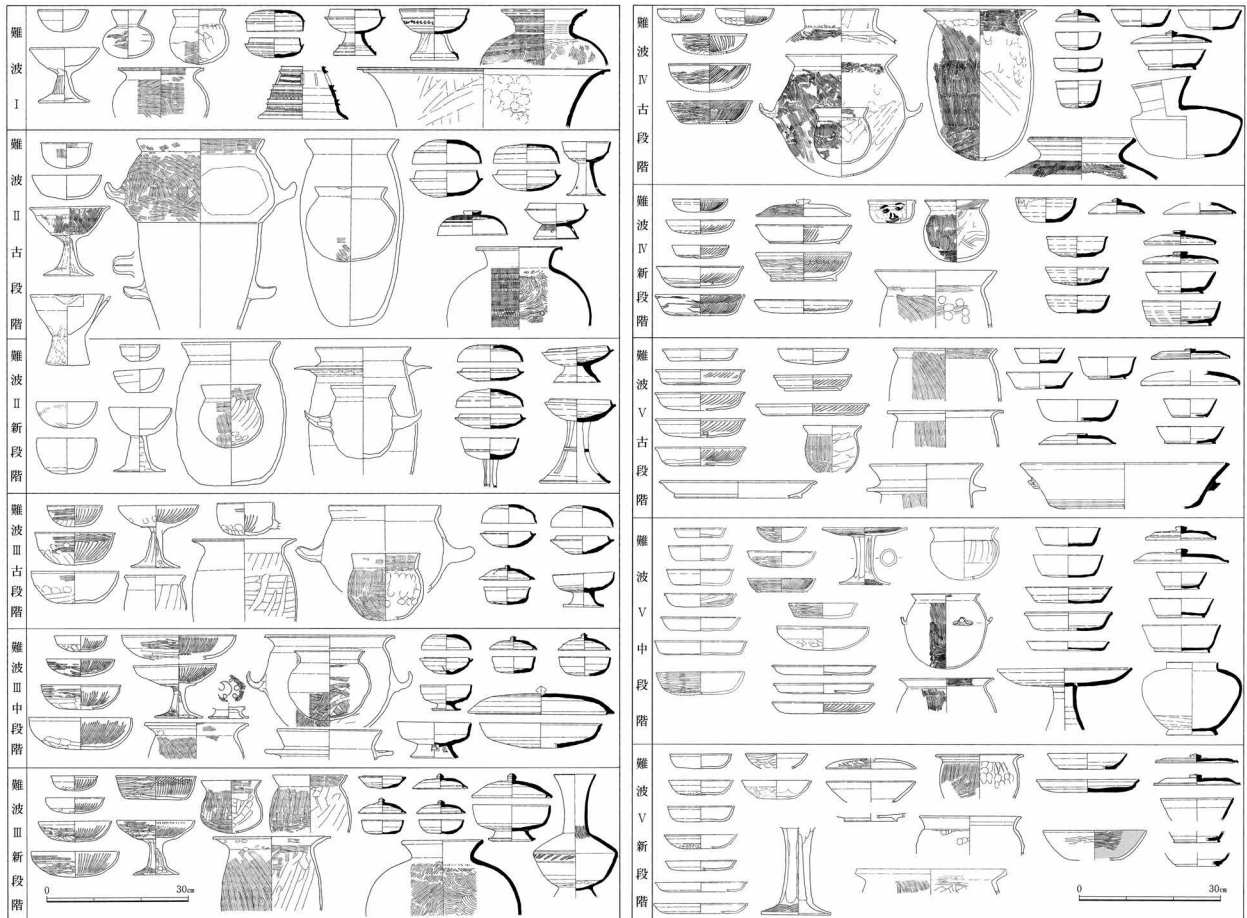


図1 難波地域の土器編年〔佐藤2000〕

新段階は、土師器の食器類として平底から体部・口縁部が直線的にのびる杯Aが現れる。須恵器の食器類では杯H・Gがともに最も縮小するが、杯Gには杯Aにつながると考えられる法量の大きな一群が確実に存在する。中段階からこの段階までのうちに杯Bが現れている。この段階の代表例には、住友銅吹所下層DB91-1次溝SD801〔大市協1998〕、大坂城跡OS90-50次土坑SK502〔大市協2004〕、NW99-15次鍛冶関係遺構群〔大市協2002a〕、大阪府文化財センター調査谷16層他〔大府セ2002・2006〕などの資料がある。これらの他、難波地域の調査で初めて出現期の杯Bの存在を認識したOS99-16次谷第5層〔大市協2002b〕や、OS11-16次溝SD601b〔大市研2012c〕も中段階からこの段階までにおさまる資料である。後に挙げた2資料を含めて、出土分布範囲が宮域周辺を越えて広がっていることに注目しておきたい。

難波IV 上町台地上での人々の活動が見えにくくなり、資料は縁辺部の調査地でおもに出土している。土師器では定型化した杯Aが現れ、杯Cの形態が浅くなる。須恵器では杯A・Bが主体となり、杯B蓋のうち、かえりのない器形が増えていく。前代までの主要器形であった杯H・Gが減少していく。こうした動きの進み具合によって古・新段階に細分する。

古段階では、土師器の食器類に定型化した杯Aが現れるが、杯Cがまだ主体である。杯Cはかなり浅くなって皿に近い形態となる。須恵器の食器類は杯Gが主体で、杯A・Bがしだいに多くなる。杯Hはわずかに残る程度である。杯B蓋はかえりをもつ形式がほとんどである。この段階の代表例には

OS03-13次SK901・902・SD901〔大市教・大市協2005〕、MR94-8次SD701〔大市協1996〕、UH08-9次SE105〔大市研2012a〕から出土した土器群がある。

新段階では、土師器杯Aが杯Cに替って主要器形となる。須恵器の食器類は杯A・Bが主体で、杯B蓋はかえりのない形式が大半を占める。杯Gは減少する。この段階の代表例としてはOS92-74次Ⅲ8b層〔大市協2002c〕から出土した土器群がある。後続する難波V古段階と比べて資料数が少ない。

2) 飛鳥地域

飛鳥地域の土器編年は、西弘海氏によって飛鳥I～Vという基本的な枠組みが示された〔西1978・1982〕。その後には付加された資料も含めて、小田裕樹氏が表1のようにまとめている〔小田2014〕。各資料の文献はそれに挙げられているので基本的には割愛するが、本論で特に取り上げて検討する資料については適宜提示することとする。

飛鳥I 金属器模倣の土師器杯C、須恵器杯Gが現れる。須恵器では杯Hが杯Gよりも多い。西氏が編年を行なった後も資料の増加によって細かい流れが追えるようになってきている。古宮遺跡(旧小墾田宮推定地)石組溝SD050東部上層・溝SD124、川原寺下層溝SD02・SD367(SD367は下層のみ)、山田寺下層流路SD619・整地層、石神遺跡溝SD4260、甘樫丘東麓遺跡焼土層SX037・土坑SK184、飛鳥池遺跡谷SD809灰緑色粘砂層などがある。

飛鳥II 土師器杯Cの径高指数が減じる。初源的な杯Aがわずかに見られる。須恵器杯Gは杯Hと拮抗する割合で出土する。どちらの杯も法量が縮小する。代表例として坂田寺跡池SG100の土器群がある。なお、従来は飛鳥IIのなかでも新しい段階として水落遺跡貼石遺構周辺の資料が挙げられていたが、最近の再検討では一括性のある土器群ではないという評価がされている〔尾野他2016〕。

飛鳥III 土師器杯A、須恵器杯A・Bが定型化し、法量分化が見られる。須恵器杯Gはこれらと共存するが杯Hはわずかに残る程度となる⁴。代表例として、大官大寺下層土坑SK121・井戸SE116、藤原宮西方官衙土坑SK1366、藤原京左京六条三坊井戸SE2355の土器群がある。表1ではそれらに加えて石神遺跡井戸SE800が挙げられているが、飛鳥Iからの資料を含むことや食器類が少ないことから今回の検討からは省く。

飛鳥IV 土師器・須恵器の食器類の法量分化が進む。どちらも杯A・Bが主体で、須恵器杯B蓋にかえりをもたない形式が現れる。土師器杯Cは器高が減じて皿形化する。須恵器杯Gはわずかになる。雷丘東方遺跡溝SD110、藤原宮下層運河SD1901A、藤原宮西方官衙井戸SE8061(食器類が少ないが)・土坑SK8471の土器群がある。この他にも、飛鳥京跡⁵石組溝SD0901も質量ともに良好な資料である〔檀考研2011・小田2014〕。また、当該期の資料はこれから石神遺跡の調査成果の整理が進めば確実に増えていくと考えられる。尾野善裕・森川実・大澤正吾氏によって土坑SK1285、溝SD640・SD1347の整理途中段階の成果が公表されている〔尾野他2016〕。

飛鳥V 土師器杯Aの径高指数が減じる。須恵器杯B蓋ではかえりをもたない形式がほとんどになる。藤原宮内裏東大溝SD105、藤原宮西方官衙SE1105、藤原宮東面内濠SD2300の土器群がある。これらの他にも藤原京条坊側溝から出土する土器の大半は当該期の資料である。

表1 飛鳥地域の土器編年と代表的資料〔小田2014〕

時期区分	出土遺跡・遺構	文献	備考
飛鳥Ⅰ以前	飛鳥寺下層	年報1999-II	飛鳥寺造営開始588年以前
	山田道第3次 黒褐色土層	年報1999-II	
飛鳥Ⅰ※	古宮遺跡 SD050・SD124	報告Ⅰ	山田寺造営開始641年以前
	川原寺下層 SD02・SD367	概報10、年報1997-II	
	山田寺下層 SD619・整地層	概報20、山田寺跡	
	石神遺跡 SD4260	紀要2008	
	甘樫丘東麓遺跡 焼土層SX037	概報25	
飛鳥Ⅱ	坂田寺 SG100	概報3	斉明朝漏刻660年
	水落遺跡基壇周辺	概報4・12、報告Ⅳ	
飛鳥Ⅲ	大官大寺下層 SK121・SE116	概報6、紀要2001・2002	天智朝(近江大津宮)
	藤原宮西方官衙 SK1366	報告Ⅱ	
	藤原京左京六条三坊 SE2355	概報9・小田2012	
	石神遺跡SE800	概報15、年報1997-I	
飛鳥Ⅳ	雷丘東方遺跡 SD110	報告Ⅲ	天武末年木簡、694年以前
	藤原宮下層運河 SD1901A	概報8・紀要2009・紀要2012	
	藤原宮西方官衙南地区SE8061	概報24	
	藤原宮西方官衙南地区SK8471	概報26	
飛鳥Ⅴ	藤原宮内裏東大溝 SD105	報告Ⅲ	藤原宮期(694~710)
	藤原宮西方官衙 SE1105	報告Ⅱ	
	藤原宮東面内濠 SD2300	概報9・紀要2012	

※坂田寺SG100出土資料より古い様相をもつ資料については、飛鳥Ⅰの中に含めた。

概報:『飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報』 年報:『奈良文化財研究所年報』
報告:『飛鳥・藤原宮跡発掘調査報告』 紀要:『奈良文化財研究所紀要』

2. 両地域の土器の並行関係から読み取れる歴史的事実

1) 前期難波宮造営期に並行する飛鳥地域の土器資料

これまで難波地域と飛鳥地域の土器資料を挙げ、それらの概要を述べた。次に、それらの並行関係を整理する。筆者はすでに須恵器を中心に検討をしたことがあり〔佐藤2003〕、その成果をもとにすると、難波Ⅲ古段階は飛鳥Ⅰでも後半寄りの土器群である川原寺下層SD02・SD367下層や山田寺下層SD619・整地層などの資料とほぼ並行し、難波Ⅳ新段階は概ね飛鳥Ⅴから平城宮土器Ⅱにかかるあたりに並行する。以下では、前期難波宮造営期を中心にあらためて検討する。

難波Ⅲ古段階は上述のとおり、飛鳥地域では飛鳥Ⅰのうち川原寺下層SD02・SD367下層や山田寺下層SD619・整地層にはほぼ並行する。山田寺は『上宮聖徳法王帝説』裏書に舒明13年(641)に造営が始められたとの記載があることや、同じ段階に当たると考えられる狭山池1号窯が築かれた北堤の木樋の年輪年代が推古24年(616)であることなどから、暦年代は7世紀第2四半期を中心として、620年代から640年代と考えられる。

難波Ⅲ中段階は、先述のように前期難波宮が造営された時期の土器である。続く新段階も資料は増えてきており、整地の範囲も広がっていることなどから宮殿は機能していたと考えられる。難波Ⅲ中段階と飛鳥編年との並行関係については、飛鳥Ⅰの最新段階である飛鳥池灰緑色粘砂層や甘樫丘東麓SK184は土師器杯Cの径高指数がやや大きく、須恵器杯Gの底部調整に回転ケズリが多い点などから、難波Ⅲ中段階の資料に先行する要素が見られる。近年の甘樫丘東麓遺跡における調査成果によれば、7世紀中頃に廃絶する遺構群をⅠ期、それに続く遺構群をⅡ期（7世紀後半）、Ⅲ期（7世紀末頃）としている。Ⅰ期の廃絶年代はSK184やSK160〔奈文研2009a〕から導かれる。Ⅱ期に関連する土器はほとんど図示されていないが、その整地土の主体は飛鳥Ⅱ～Ⅳという記述があり〔奈文研2007〕、かつこれまでの調査の概要報告では飛鳥Ⅳまでの土器はきわめて少ない状況に見える。この遺跡においては7世紀にずっと間断なく人々が活動していたというわけではなさそうである。これを『日本書紀』の記事と重ね合せてみると、Ⅰ期の廃絶は皇極4年（645）の乙巳の変による蘇我本宗家滅亡に関連する可能性がきわめて高い⁶。その後、甘樫丘東麓は天武天皇による飛鳥の再整備までしばらく手つかずに近い状態であったと考えられる。

飛鳥Ⅱの坂田寺SG100は、小田裕樹氏は難波宮跡水利施設第7層と同様相とするが〔小田2014〕、詳しく比較すると、須恵器杯H・Gの法量がわずかながら難波Ⅲ新段階に近いように見える。こうしたことは筆者がこれまでも、難波Ⅲ中段階を飛鳥池灰緑色粘砂層から坂田寺SG100にまたがらせるくらいで位置づける、と指摘してきたとおりである〔佐藤2014〕。なお、甘樫丘東麓SX037との関係は、並行するとしばしば誤解されて伝えられたことがあるが〔菱田2011、白石2012〕、難波Ⅲ中段階よりは先行するものとあらためて述べておく。

難波Ⅲ新段階は、これまでは水落遺跡貼石遺構周辺資料〔奈文研1995a〕に並行すると考えてきたが、先述のように同資料は一括性をもたない資料として再認識されている〔尾野他2016〕。この結果、難波Ⅲ新段階との並行関係を通じて660年代のあたりと考えていた難波Ⅲ中段階の下限は再検討が必要になった。しかし、難波地域における難波Ⅲ新段階の存在はもはや動かし難く、大阪府センター調査谷16層やその他の資料を見ると法量分化も多様化へ向かっており、後述する飛鳥Ⅲの前段階の様相として理解することができる（図2・3）。飛鳥地域でも漏刻との関連はわからなくなったものの、最も法量が縮小した杯H・Gの一群が水落遺跡の周辺で使用されていたことは確かであろう。飛鳥Ⅲの資料との型式差を考えると、水落遺跡貼石遺構が代表していた段階の資料はやはり存在すると想定できる。おそらくは、川越俊一氏が飛鳥Ⅱのもうひとつの資料として挙げた西橋遺跡の土器群がそれに当たるであろう〔川越2000〕。この資料については正式な調査報告書が刊行されていないが、「四月中十七日水□□」と記された木簡が共伴しており、4月17日が二十四節気のうちの中気小満に当たるという意味で、7世紀後半では斉明7年（661）か天武元年（672）が該当するとのことである⁷。したがって、飛鳥Ⅱの坂田寺SG100や飛鳥Ⅰの諸資料の暦年代がまとめて降ってしまうわけではない。ただし、この資料を含めても、飛鳥Ⅱは西氏による編年の提示から現在までほとんど良好な資料が増えていないことは事実であろう。林部均氏が整理した飛鳥宮跡（林部氏は「伝承飛鳥板蓋宮跡」と呼ぶ）から出土した土器も、上層遺構の保存のために下層遺構の掘り下げが限られているとはいえ、飛鳥Ⅱまで

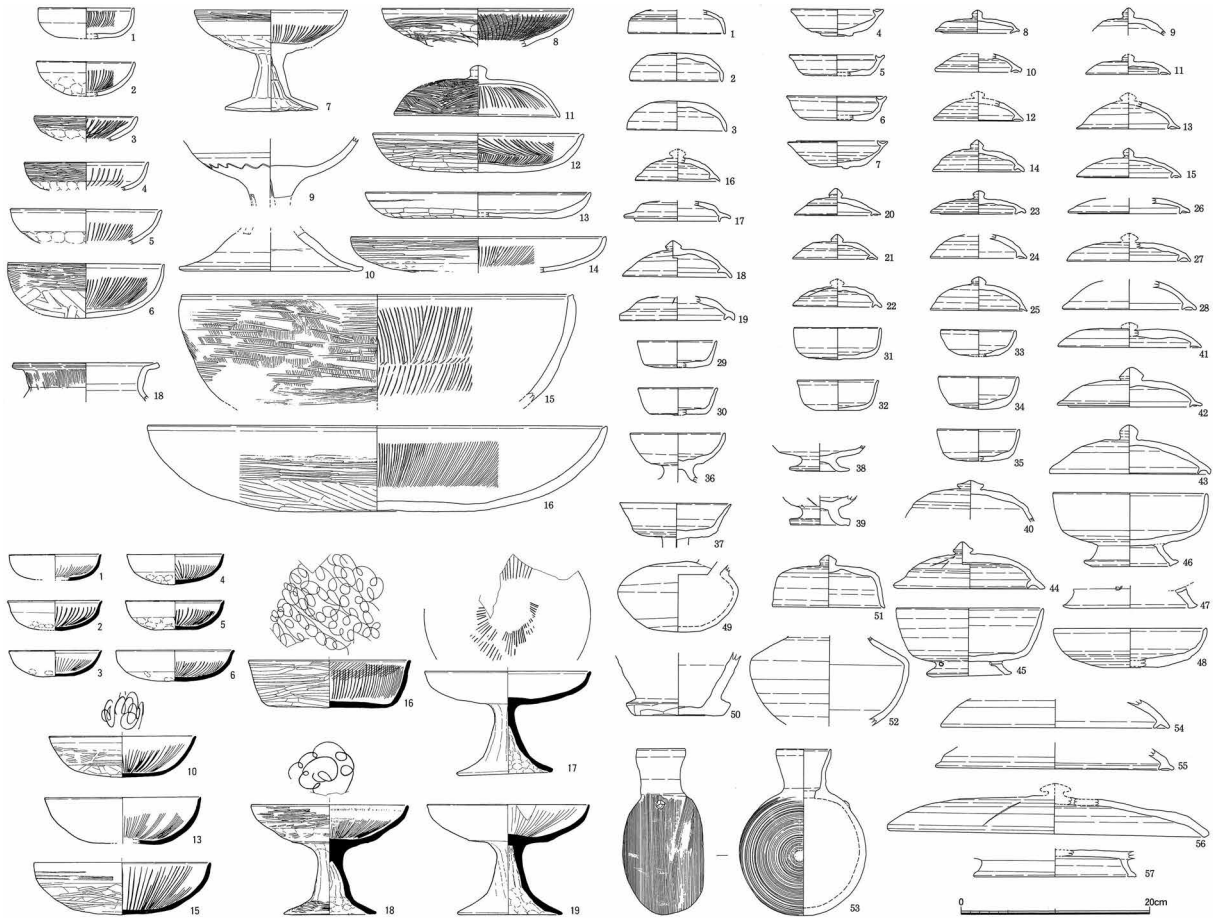


図2 難波Ⅲ新段階の土器（難波宮跡谷16層〔大府セ2002〕・住友銅吹所下層SD801〔大市協1998〕）

の土器はわずかであり、飛鳥Ⅳ以降の土器が格段に増える〔林部1998〕。尾野氏らが紹介した飛鳥地域の東海産須恵器についても、単発的とはいえ飛鳥Ⅰにはいくつかの例があるが、飛鳥Ⅱは坂田寺SG100の1点（しかも可能性）のみで、あとは飛鳥Ⅳの資料である。飛鳥Ⅲの大官大寺下層SK121でも一定量の東海産須恵器はあるようなので、飛鳥Ⅱの少なさが一層目立つ。

2) 飛鳥地域における資料の増加

難波Ⅳ古段階の資料は、前段階に比べて宮域やその周辺からの出土数が激減する。宮域東方の谷からはNW10-4次第6-4層から多量の焼け壁片が出土し、朱鳥元年（686）の難波宮焼亡を物語る資料として注目されたが〔大市研2012b〕、当該期の土器はわずかしか出土していない。むしろその下位層から出土している難波Ⅲ中～新段階の土器が多い。難波Ⅳ古段階の代表例として挙げたOS03-13次SK901・902・SD901、MR94-8次SD701、UH08-9次SE105はいずれも宮域外である。それらに並行するのは飛鳥Ⅲおよび飛鳥Ⅳである。

飛鳥Ⅲの代表例には、先述のように大官大寺下層SK121や藤原京左京六条三坊SE2355〔小田2012〕があるが、この段階も当初からほとんど資料が増えていない。林部均氏は、自身の編年の枠組みによる“飛鳥Ⅱ新段階”（=水落遺跡貼石遺構）と奈良文化財研究所の枠組みである飛鳥Ⅲの資料との間に「型式学的な飛躍が認められる」として、飛鳥Ⅲを古段階・新段階に細分した。古段階は大津宮関

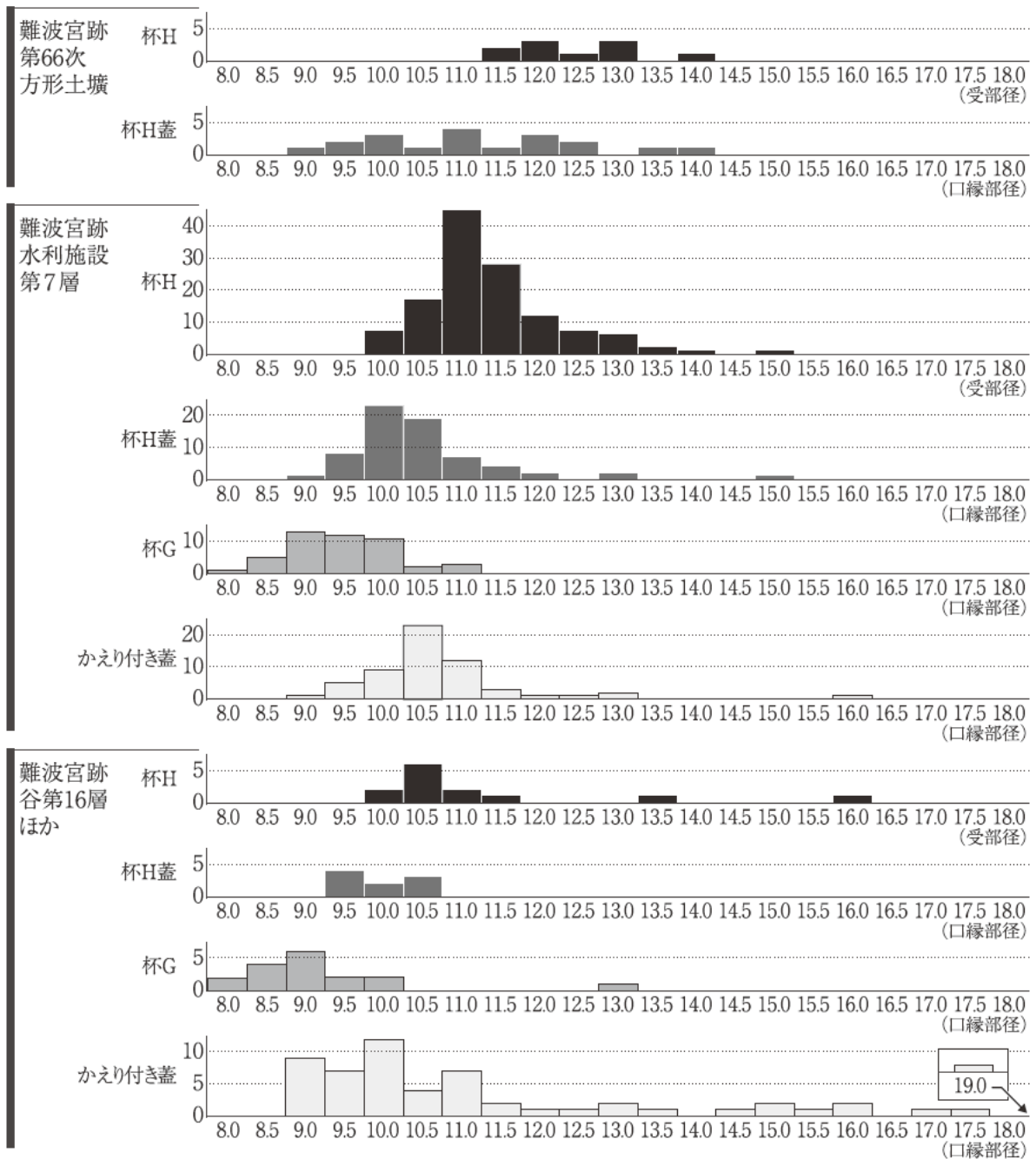
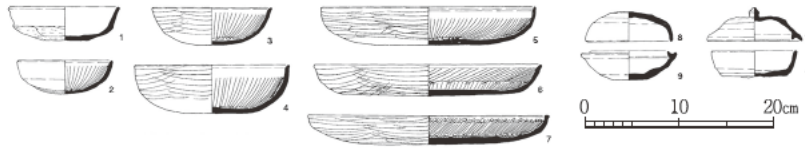


図3 難波Ⅲにおける食器類の法量分布〔佐藤2014〕

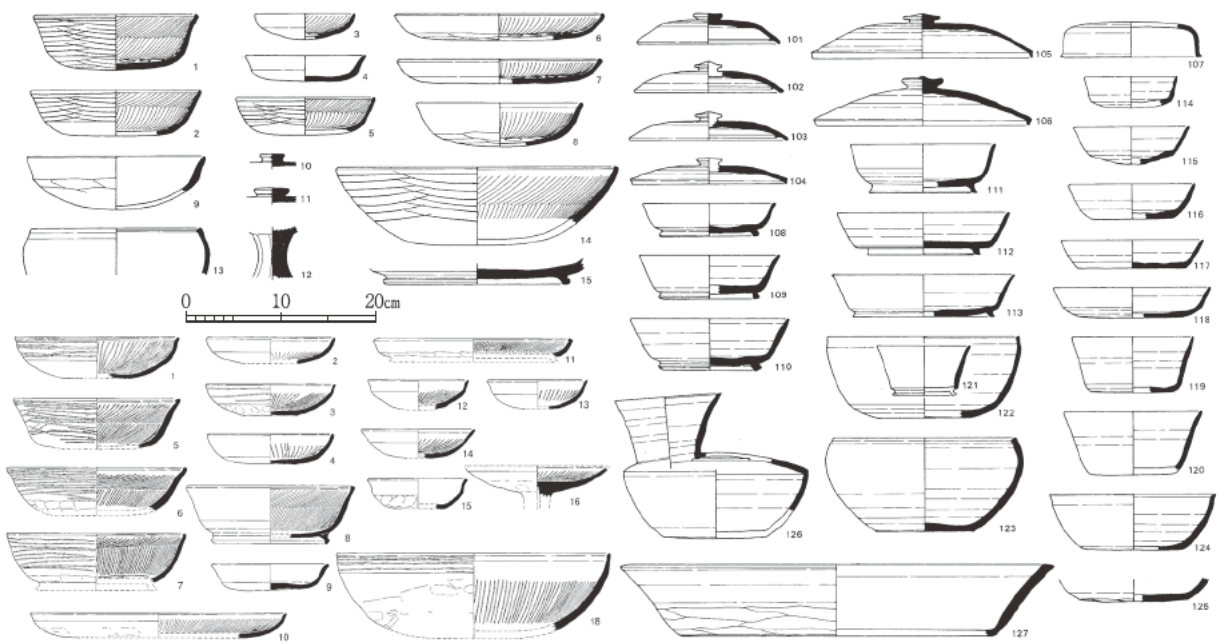
連資料で、新段階は大官大寺下層SK121などの資料とする。筆者は飛鳥Ⅲを細分する必要性は感じていないが、たしかに飛鳥Ⅱの資料や飛鳥Ⅳの代表例である雷丘東方遺跡SD110などの資料と比べると、後者との様相差がより小さく見える(図4)。その内容としては、飛鳥Ⅲ・Ⅳでは土師器・須恵器ともに杯A・Bが定型化すること、土師器杯Cの器高がこの間に低下していくこと、いったん極限まで縮小した須恵器杯Gの法量が再び大きくなることなどである。飛鳥Ⅲ・Ⅳの様相の近さは、西氏が編年を提示した段階では同じ第Ⅲ期にまとめられていたとはいえ、それほど強く意識されていなかったが、大官大寺下層SK121や藤原京SE2355といった資料の詳細な提示が進むにしたがって明らかになってきた。もともと資料数が少なく、かつ類例も増えない現在の状況からは、飛鳥Ⅲの資料は飛鳥Ⅳの



飛鳥Ⅱの土器(坂田寺SG100[奈文研1973])



飛鳥Ⅲの土器(大官大寺下層SK121[西口・玉田2001])



飛鳥Ⅳの土器(雷丘東方遺跡SD110[奈文研1980]・藤原宮下層SD1901A[奈文研2012])

図4 飛鳥Ⅱ～Ⅳの土器

なかの最古相を示す資料という位置づけも可能かと考える。また、従来からこの時期に資料が少ないことは大津宮に遷都していたからであろうと解釈されてきた。大津市山ノ神窯跡群では須恵器杯A・B・Gを含む多様な器形が複数の窯で集中的に生産される。その契機としては、やはり大津宮遷都の可能性が最も高いと、他の大津市内出土資料の位置づけとともにかつて筆者も述べたことがある〔佐藤2003〕。その想定が妥当であれば、飛鳥Ⅲの暦年代は天武朝にはほぼ位置づけられる飛鳥Ⅳの直前となり、天武朝の初期に及ぶ可能性もある。結果としては同じような評価に帰着する。

続く飛鳥Ⅳの資料は飛鳥宮跡周辺や石神遺跡、藤原宮・京跡下層の先行条坊側溝などからまとまった資料が得られており、今後も増えていくと考えられる。最近行なわれた調査成果の検討では、特に東海産の須恵器が爆発的に増加することが注目されており〔尾野他2016〕、この現象は宮域周辺における人口の急激な増加と連動したものと指摘されている。先に述べた難波地域の難波Ⅳ古段階における宮域周辺で出土する土器の激減と対照的な動きであり、両地域を土器資料の多寡という観点で見渡すと、難波Ⅲ中段階から新段階にかけては難波地域における動きが活発であり、飛鳥Ⅳではその傾向が逆転するという流れが明らかとなる。

これまで述べてきた土器資料の推移を整理すると、飛鳥Ⅰ（山田寺下層）→飛鳥Ⅰ（甘樫丘東麓Ⅰ期廃絶に伴う土器群）→難波Ⅲ中段階→同新段階→飛鳥Ⅲ→飛鳥Ⅳという流れがそれぞれ前後に重なる要素をもちながら見られる。飛鳥Ⅰ（山田寺下層）には舒明13年（641）という年代の手がかりがあり、飛鳥Ⅰ（甘樫丘東麓Ⅰ期廃絶に伴う土器群）は皇極4年（645）の乙巳の変に関わる可能性が高い。飛鳥Ⅳの土器群には天武天皇治世の干支や冠位「進大肆」などが記された木簡（680年代前半）が共伴しており、飛鳥Ⅲと飛鳥Ⅳとを概ね大津遷都の天智6年（667）から壬申の乱を経て飛鳥浄御原宮の時期と考えることができる。難波Ⅲ中段階は、飛鳥Ⅰ（甘樫丘東麓Ⅰ期廃絶に伴う土器群）より新しく、飛鳥Ⅲ（660年代後半から670年代とされる）よりも難波Ⅲ新段階の一定期間をはさんでさらに古い。難波Ⅲ新段階のもつ年代幅をどれくらい見積もるかは明らかでないとしても、これまでの理解と同様に、難波Ⅲ中段階は650年代を中心とする暦年代に落ち着く結果となると考えられる。また、天武12年（683）には「凡都城・宮室非一処。必造両参。故先欲都難波。」といういわゆる「複都制の詔」が出されているが、土器資料からみるかぎり、難波宮の宮域およびその周辺における動きは低調である⁸。

3) 飛鳥編年の現状と“律令的土器様式”論の虚実

飛鳥編年の飛鳥Ⅰ～Ⅴは、先にも触れたように西弘海氏によって基本的な枠組みが提示された。西氏は初めの論文〔西1982（脱稿は1974）〕において、飛鳥地域の資料を中心に大阪府や関東の資料で補いながら7世紀における新たな土器様式への転換とその成立についての考察を行なっている。それは古墳時代前期に盛行し、弥生時代後期まで型的な祖型が遡る小形丸底土器・器台のセットから、平安時代後期の瓦器出現までを見通したスケールの大きな「素描」のなかで、5世紀以降の須恵器導入期をも凌ぐような画期として取り上げたものである。その後の『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』の考察〔西1978・1980〕では、前論文で資料の制約があるとしてひとつにまとめていた第Ⅲ期を飛鳥Ⅲ・Ⅳ

に細分したが大きな流れは変更していない。これらの論文・考察を読み比べると、西氏が大きな画期としているのは前者の第Ⅲ期後半で、後二者では飛鳥Ⅳに当たる。西氏が提示した土器様式成立への動きは、第Ⅰ期（＝飛鳥Ⅰ）における金属器指向による新たな器形の出現と土師器杯Cに見られる法量分化に始まり、それが発展して第Ⅲ期後半（＝飛鳥Ⅳ）には多様な器形の出現とその法量の規格性、およびその結果としての土師器・須恵器間における互換性の確立によって様式が成立すると考えるものである。これは「律令制を基軸とする国家体制」が整えられるなかで、「大量の官人層の出現とその特殊な生活形態」によって生まれたものとし、西氏は「いささか奇妙な表現ではあるが」とことわりながら、この新たな様式を「律令的土器様式」と呼んだのである。最近の小田裕樹氏による飛鳥Ⅲを高く評価する動き〔小田2012・2016a・b〕は、西口壽生・玉田芳英氏が大官大寺下層SK121について「律令的土器様式」の“萌芽的成立”と評価したことをうけたもので〔西口・玉田2001〕、西氏が飛鳥Ⅳで大きく変化するとした動きが実は飛鳥Ⅲですでにかなり現れているというものであろう。

飛鳥Ⅰ～Ⅴは、少なくとも現在は決してそれぞれが等質の区分ではない。これは、土器の研究者の誰もが認識していることであろう。飛鳥Ⅰは、西氏が編年を提示した頃は古宮遺跡（当時小墾田宮跡伝承地）のSD050東区上層しかなかったが、現在はそれが最も古い段階を代表し、それより新しい段階として川原寺下層SD02・SD367下層、山田寺下層SD619・整地層や甘樫丘東麓SX037、飛鳥池灰緑色粘砂層といった資料があり、それぞれの型式差によって詳細な変遷が追えるようになってきた。飛鳥Ⅱはそれとは対照的に、西氏が提示した坂田寺SG100の後は、水落遺跡の貼石遺構周辺出土資料が加えられたのみである。最近ではその水落遺跡の資料すらも代表例からは外れつつあり、飛鳥Ⅱの様相は並行する難波地域の資料と比較して質・量ともにきわめて貧弱であると言える。その結果として、飛鳥Ⅲの大官大寺下層SK121・藤原京SE2355との間には一見大きな様相差があるように受け取られる。しかし、飛鳥Ⅲもまた資料が少なく、後続する飛鳥Ⅳ・Ⅴでは資料が劇的に増加して様相が明確になる。飛鳥地域における本質上の画期はやはり飛鳥Ⅳであり、わずかな資料で語られる飛鳥Ⅲは“萌芽的”という表現が妥当かと思われる。先述のように飛鳥Ⅲはそれ単独でみるよりも、飛鳥Ⅳの最初期として位置づけたほうが理解しやすいかもしれない。

小田氏が飛鳥Ⅲを高く評価する背景には、こうした飛鳥地域における資料の粗密が少なからず影響しているのではないかと筆者は考える。飛鳥Ⅱの前段階である飛鳥Ⅰの後半期はかなり資料が充実している。小田氏はその甘樫丘東麓SK184⁹を、飛鳥Ⅱの坂田寺SG100の資料を示さずに（示しても結果は変わらないが）、飛鳥Ⅲの大官大寺下層SK121と比較して大きな画期を想定し、それを小田氏なりの“律令的土器様式”の成立とする〔小田2012・2016a・b〕。しかしながら、いくつか間に入るべき段階を欠落させて比較すれば、様相差が実際以上に大きく見えるのは当然である。また、古いほうの飛鳥Ⅰの資料に対しては小型丸底食器を基本とする“飛鳥時代前半期土器様式”なる新しい概念で捉え、“律令的土器様式”への様式転換が起こるとするが、西氏が提示した様式成立への動きは、繰り返しになるけれども第Ⅰ期（＝飛鳥Ⅰ）における金属器指向による新たな器形の出現と土師器杯Cに見られる法量分化に始まり、それが発展して第Ⅲ期後半（＝飛鳥Ⅳ）には多様な器形の出現とその法量の規格性、および土師器・須恵器間における互換性の確立によって様式の成立に至ると考える

ものである。これを分断して別物の様式を設定することについては、そもそも須恵器杯Gは明らかに平底を意識してつくられており、これを含めて“丸底食器”と一括りにするのはかなり強引な解釈であって、杯G出現の意義を正しく評価できていない。また、小田氏が飛鳥地域の資料のみをもって強調する飛鳥Ⅰと飛鳥Ⅲとの大きな様相差は、その間に難波地域の難波Ⅲ中～新段階の諸資料を介在させることによって解消され、もともと西氏が想定していた様式の萌芽から発展、成立というきわめて円滑な流れとなる。難波Ⅲ中～新段階に飛鳥地域に先んじて台付食器＝杯B（別系譜の脚台付杯もある）が現れる要因も、この時期にどちらの地域が活況を呈していて、先進的な文化を導入する機会に恵まれていたかを考えれば容易に理解することができよう。このように、あくまでも土器資料の粗密からの観点からではあるが、7世紀において人々の動きが最も活発であったところ、すなわち政治の中心はずっと飛鳥地域にあり続けたわけではなく、飛鳥Ⅰでは飛鳥地域→飛鳥Ⅱの頃は難波地域→（大津宮をはさんで）飛鳥Ⅳ以降は飛鳥地域と動いていった歴史的事実を読み取ることができる。

むすびにかえて—『日本書紀』における「斉明紀」をめぐる—

以上、難波地域と飛鳥地域の土器資料を比較するという観点で、当時のふたつの都における動向を追ってきた。飛鳥地域に関しては、特に甘樫丘東麓遺跡で顕著に見られるように飛鳥Ⅰの最終段階をもって遺構・遺物が途切れるといった事実があり、それは『日本書紀』皇極4年（645）の乙巳の変による蘇我本宗家の滅亡とその後の難波遷都に概ね符合している。また、飛鳥Ⅲの資料が少ないながらも次の飛鳥Ⅳにつながる様相をもち、飛鳥Ⅳでは飛鳥地域全体に遺構が広がって資料が急激に増加するという現象は、天智6年（667）の大津宮遷都から天武元年（672）の壬申の乱を経て天武朝における飛鳥地域の再整備と対応する。こうした動きには『日本書紀』の記事との齟齬があまり見られない。

その反面、飛鳥Ⅱではこのようにうまくはいかない。それはやはり難波地域の扱ひであろう。冒頭で触れたように、前期難波宮について歴史研究者の多くが陥っているいちばんの問題は、この宮殿が孝徳朝か天武朝かという二者択一論である。それは『日本書紀』が、宮殿の造営に関しては誤りなく、かつ抜け落ちもなく記述しているという前提に基づいている。しかし、本論でこれまでみてきたように、孝徳天皇の時代からその没後しばらくの間（おそらくは白村江の戦いまでくらいか）は人々の活動が飛鳥地域よりも難波地域のほうが盛んであったことは土器資料からは見えても、『日本書紀』からは読み取れない。筆者が「難波長柄豊碕宮」という名称や、白雉3年（652）の完成記事に拘らないのはこのことによる。それは前期難波宮孝徳朝説の否定ではない。

しかし、こうした難波地域と飛鳥地域との関係が、土器の比較検討以外ではなぜこれまで明瞭に見えてこなかったかという疑問についても触れておく必要がある。その最大の原因は、もちろん『日本書紀』に見られる飛鳥地域中心の記述である。また、その記述と関わって飛鳥地域の特殊性を強く印象づけるものとして、以下ではみつつの事例に着目してみたい。

ひとつめは水落遺跡の貼石遺構および建物群（A期）である〔奈文研1995a〕。貼石遺構は、『日本書紀』斉明6年（660）の「皇太子初造漏刻」の記事にある水時計が置かれた基壇である可能性が高く、

現在のところそれに対する異論は聞かない。貼石遺構の基壇土から出土したと考えられる土器からみて7世紀中頃に造営されており、斉明6年(660)に近い暦年代であることは確かである。また、一括性のない資料とはいえ、飛鳥地域では少ない飛鳥Ⅱの土器がこの遺構の周辺から比較的まとまって出土しているのは、やはり人々の活動の痕跡とみることができよう。

ふたつめは上記の水落遺跡の北に隣接する石神遺跡である。この遺跡は“斉明朝が最盛期”で、その時期の中枢部は“饗宴施設”であったと奈良文化財研究所による年次調査の概要報告で述べられ、他の多くの概説書で同様に紹介されている。本論の目的はこの遺跡の性格を詳細に検討することではなく、正式な調査報告書が刊行されるのを待つ状況で情報も限られていることから、斉明朝とされる遺構に関わって概要報告から読み取れたことを述べておく。なお、21次に及ぶ概要報告の文献は多いので、ここでは主要なものにとどめることとする。この遺跡の時期区分は多くの場合、7世紀をA・B・C期として、そのうちA期は調査開始時から第13次調査くらいまでは斉明朝という前提で遺構が解釈されてきた。現在は、A期は大きくA1・A2・A3期の3期に細分され、7世紀前半～中頃と年代づけられている¹⁰。B期は天武朝、C期は藤原宮期とされる。A3期には中枢部に長廊状の建物による区画が東西に近接して存在すると理解されている。概要報告を読んで気づくことは、西区画の建物の多くに柱抜き穴から焼土が出土するという記述が見られるのに対して、東区画の建物にはそれが認められないことである。東区画の南にある井戸SE800が飛鳥Ⅰに廃絶した後、飛鳥Ⅱ～Ⅲの土器が捨てられる状況になっていた可能性があること、東区画の造営年代は7世紀第2四半期の土器を含む土坑が埋め立てられた後であるが〔尾野他2016〕、造営開始がその直後である可能性を否定する資料は現在のところ提示されていないこと、造営方位から西区画が東区画よりも時期が新しいという指摘があること〔奈文研1995b〕、西区画の南に隣接する水落遺跡北部の建物や貼石遺構の柱・木箱の抜き穴に炭化物・焼土¹¹が見られること〔奈文研1995a〕、以上のような手がかりから、東区画は西区画よりも早い時期に造営され、西区画が機能していた段階(A3期の最終段階)にはすでに存在していなかったという想定も成り立ちうるかもしれない。また、西区画の半分以上が未調査なので今後資料が増える余地はあるとしても、飛鳥Ⅱ・Ⅲの土器の報告事例がきわめて少ないことは本論の主張と矛盾していない。

みつめは、特異な亀形石槽で知られる酒船石遺跡の大規模な導水施設である。この施設の下層遺構(I期)からⅡ期までの整地層から法量のきわめて縮小した須恵器杯Hや器高の低い土師器杯Cなど飛鳥Ⅱ～Ⅲの土器が出土しており〔明日香村教委2006〕、最も大きな規模に整備されるのはⅡ期で飛鳥Ⅳである。報文では亀形石槽と船形石槽はⅡ期の改修時にI期のレベルから高く据え直されたと推定されているが、厳密にはI期段階におけるこれらの石槽の据付け痕跡は確認できておらず、I期から存在した確実な根拠はない。飛鳥宮跡北西の苑池遺構の造営年代も遡る可能性が指摘されているものの、確実な土器は飛鳥Ⅳ以降のものである〔榎考研2012〕。やはり土器からみてきたように、飛鳥地域の本格的な再整備の時期は飛鳥Ⅳなのであろう。酒船石遺跡のふたつの石槽が斉明朝の所産という印象が強いのは、飛鳥地域に見られる他の石造物群とともに、斉明2年(656)の「狂心渠」に代表される度重なる土木工事や、多くの饗宴の記事などに影響を受けているのではないかと思われる。

しかし、これらの石造物の多くは明確な年代の根拠を伴わない。

ここに挙げた3例を含めて、飛鳥地域の遺構は7世紀において圧倒的な存在感をもっており、本論で土器資料から述べてきたような難波地域と飛鳥地域との関係はこれまで意識されることがなかった。酒船石遺跡ではふたつの石槽が遡るのかどうかは別として、I期から大規模な導水施設が存在したことは確実であり、水落遺跡の貼石遺構や石神遺跡の西区画などとともに、たとえ限られた範囲であっても、飛鳥Ⅱ～Ⅲの時期においてこうした施設を営むことのできる勢力が存在したことは注意しておかねばならない¹²。ただし、酒船石遺跡のI期は飛鳥Ⅱよりも遡る可能性があり、また、先に石神遺跡のA3期のうち東区画について想定したように、土器を手がかりにすることによって新たな遺跡の理解ができる余地はまだあると考える。

以上、本論で述べてきた内容は、『日本書紀』の記事を絶対視しては発想されないことを多く含んでいる。筆者は土器というリアリティのある考古資料を題材にして、その質・量の比較をとおして難波地域・飛鳥地域というふたつの都の変遷について考えてみた。もう一度、難波編年と飛鳥編年の関係を以下のように整理しておく。

難波Ⅲ古段階	飛鳥Ⅰ (川原寺下層・山田寺下層) 飛鳥Ⅰ (甘樫丘東麓Ⅰ期廃絶に伴う土器群)
難波Ⅲ中段階	◀飛鳥地域では土器が減少▶ 飛鳥Ⅱ (坂田寺S G100)
難波Ⅲ新段階	飛鳥Ⅱ (水落遺跡貼石遺構 西橋遺跡?) 飛鳥Ⅲ ≡ 大津宮? 飛鳥Ⅳの最古相の可能性
難波Ⅳ古段階	飛鳥Ⅳ ◀飛鳥地域では土器が急激に増加▶

難波地域における盛期は7世紀第3四半期のいつ頃までのものなのか、大津宮は両地域とどのように関連するのかなどについては、検討するための資料がまだ整っていないけれども、今後の発掘調査が進展することでこうした課題に対する答えが見えてくることに期待したい。それによって、『日本書紀』との新たな向き合い方が生まれると筆者は考えている。

註

- (1) 本論の「飛鳥地域」とは、飛鳥諸宮が営まれた狭義の飛鳥ではなく、藤原京域(「藤原京」は『日本書紀』にはない語であるが、藤原宮の周囲に展開する京域として使用する)なども含んだ広範囲の地域を指す。
- (2) 南秀雄氏の編年では4期に含められているが〔南1992〕、筆者は難波Ⅲ中段階でもやや古い様相として位置づけている〔佐藤2014〕。
- (3) 黒田慶一氏は、前期難波宮の西八角殿院から内裏にかけての地区に存在するN23°Eの方位をもつ難波宮下層の建物・柵・溝群を官衙遺構として紹介している〔黒田1988〕。黒田氏はこれらを難波大郡と推定するが、湊哲夫氏は自身の前期難波宮天武朝説の根拠としてこれらの遺構群を挙げ、下層集落→下層官衙→前期難波宮という新旧関係を想定し、下層官衙を『日本書紀』に記される味経宮と推定した〔湊2013〕。しかし、下層集

落と下層官衙との新旧関係は、層位や遺構の切り合い関係からは明らかでない。出土遺物からも、下層官衙では溝から丸瓦・平瓦が出土していることから上町台地における瓦葺き建物の出現、すなわち四天王寺創建以降と推定されるだけで、7世紀中頃以降に降る根拠はまったく得られていない。また他にも、水利施設第7a層出土のかえり付き蓋のみから第7a層全体を難波Ⅲ新段階に、OS99-16次調査谷第5層出土杯Bを飛鳥Ⅲと断定するなど、土器の考古学的理解に問題があること、水利施設が廃絶した後の堆積層（第6a層）から難波Ⅳ古段階の土器が出土しており、天武朝に当たる7世紀第4四半期にはすでに機能していなかったこと〔大市協2000〕、難波Ⅲ中・新段階に比べて難波Ⅳ古段階は宮域およびその周辺からの出土数が格段に減少すること（内裏・朝堂院に土器が少ないこととは別次元の問題）などの理由から、湊氏の説は成り立ち難い。

- (4) 飛鳥Ⅲには杯Hが消滅するという見解もあるが〔小田2014〕、飛鳥Ⅳまでわずかに残ると考えられる出土事例はある〔佐藤2003〕。
- (5) 飛鳥岡本宮、飛鳥板蓋宮、後飛鳥岡本宮、飛鳥浄御原宮が重層的に営まれたと考えられている「飛鳥宮跡」（奈良県の周知の埋蔵文化財包蔵地名）について、奈良県立橿原考古学研究所は「飛鳥京跡」という名称で発掘調査を行ってきている。
- (6) 相原嘉之氏も同様の指摘をしている〔相原2016〕。
- (7) 川越氏は土器の型式から661年とみるべきとしながら、それを根拠のひとつとして飛鳥Ⅱの暦年代の下限を660年代と考えているが、これは循環論法である。なお論文中には「中気小溝」とあるが、これは「中気小溝」の誤記であろう。土器群の様相は相原嘉之氏が研究会において提示した実測図から窺い知ることができる。坂田寺跡SG100の資料と比べると、土師器では、杯Aの器高が減じて定型化へ向かう傾向にあること、杯Bおよび蓋が見られること、高杯の杯部がわずかに浅くなっていること、須恵器では杯G・同蓋に量量が縮小したものが見られることなどから、後出する要素をもち、飛鳥Ⅲの代表例である大官大寺下層SK121〔西口・玉田2001〕との中間の様相に見える。
- (8) 林部均氏は前期難波宮東方官衙のA期からB期への建替えについて、B期を天武朝と理解する〔林部2013〕。しかし、根拠となっている土器は難波Ⅲ新段階に含めてもよいもので（1点のみなので幅をとって考えた〔佐藤2001〕）、必ずしも天武朝まで降らせる必要はない。また、もう1点「明らかに飛鳥Ⅲ・Ⅳまで下がる」として南外郭の一部の造営を天武朝に結論づけているNW90-29次の須恵器杯〔大市協2004〕も、難波Ⅲ新段階の量量が大きいほうの杯G（蓋を伴わなければ杯Aとなる）と考えることは可能であり、一部分の造営が難波Ⅲ新段階までかかったという解釈もできる。
- (9) 小田裕樹氏は最新の論文において、SK184の土器を「飛鳥Ⅰの新しい段階から飛鳥Ⅱに位置づけられる」とするが〔小田2016b〕、これは小田氏が（あるいは奈良文化財研究所が）作成した表1の枠組みと整合しない。また、こうした理解をしても、飛鳥Ⅲとの間に複数段階が存在する事実そのものは変わらない。
- (10) 最新の見解では、A期はA1・A2・A3-1・3-2・3-3期に細分されると記述されているが、これは遺跡北部における成果であり〔奈文研2009b〕、細分が遺跡全体に共通するものかを読み取れない。したがって、A3期として挙げられている遺構を対象に記述する。
- (11) 炭化物・焼土に伴ってとりべや鞆羽口、鉾澁などが出土しており〔奈文研1995a〕、付近に金属製品を生産する工房が存在したと考えられる。しかし、石神遺跡の概要報告では建物・堀が火災により焼失したという所見もあり、両遺跡の焼土のなかに壁土の破片が含まれていることも注目すべき事実である。
- (12) 飛鳥宮跡のⅢ期遺構もこの時期に造営されている。斉明2年（656）の後飛鳥岡本宮に比定する説が有力である〔林部1998など〕。これまでの研究史では、広大な朝堂院をもつ前期難波宮とこの宮殿との比較から、前期難波宮の年代観に対して疑問が呈されることもあったが、本論で述べてきたような難波・飛鳥両地域の関係が宮殿の構造にも反映したと考えることも可能であろう。

【引用・参考文献】

- 相原嘉之2016、「甘樫丘をめぐる遺跡の動態—甘樫丘遺跡群の評価をめぐる—」『明日香村文化財調査研究紀要』第15号、明日香村教育委員会、1-24
- 明日香村教育委員会2006、『酒船石遺跡発掘調査報告書 付、飛鳥東垣内遺跡・飛鳥宮ノ下遺跡』
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 (2002・03・04)』
- 大阪市文化財協会1981、『難波宮址の研究』第七
1992、『難波宮址の研究』第九
1996、『森の宮遺跡』Ⅱ
1998、『住友銅吹所跡発掘調査報告』
2000、『難波宮址の研究』第十一
2002a、『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—1999・2000—』
2002b、『大坂城跡』Ⅴ
2002c、『大坂城跡』Ⅵ
2004、『難波宮址の研究』第十二
2010、『難波宮址の研究』第十六
- 大阪文化財研究所2012a、『上本町遺跡発掘調査報告』Ⅳ
2012b、『難波宮址の研究』第十八
2012c、『大坂城跡』ⅩⅣ
- 大阪府文化財調査研究センター2002、『大坂城址』Ⅱ
- 大阪府文化財センター2006、『大坂城址』Ⅲ
- 小田裕樹2012、「食器構成からみた『律令的土器様式』の成立」『文化財論叢』Ⅳ、奈良文化財研究所、265-290
2014、「考察 土器群の位置づけ」『奈良山発掘調査報告』Ⅱ—歌姫西須恵器窯の調査—、奈良文化財研究所、66-79
2016a、「飛鳥・奈良時代における都城土器編年の現状」『土器編年研究の現在と各時代の特質—須恵器生産の成立から終焉まで—』考古学研究会関西例会200回記念シンポジウム発表要旨集、41-74
2016b、「古代官都とその周辺の土器様相—『律令的土器様式』の再検討—」『官衙・集落と土器 2—官都・官衙・集落と土器—』第19回古代官衙・集落研究会報告書、奈良文化財研究所、159-201
- 尾野善裕・森川実・大澤正吾2016、「飛鳥地域出土の尾張産須恵器」『奈良文化財研究所紀要』2016、94-106
- 川越俊一2000、「藤原京条坊年代考—出土土器から見たその存続期間—」『研究論集』ⅩⅠ、奈良国立文化財研究所、1-32
- 京嶋覚1989、「難波地域の土師器とその地域色」『韓式系土器研究』Ⅱ、韓式土器研究会、12-22
1994 (1989脱稿)、「『難波宮下層』土器の再検討」『大阪市文化財論集』、大阪市文化財協会、193-216
2015、「『難波型』土師器の系譜とその意義—古墳時代後期土師器の地域性と海上交通—」『大阪文化財研究所研究紀要』第16号、83-97
- 黒田慶一1988、「熊凝考—難波郡と難波宮下層遺跡—」『歴史学と考古学』高井悌三郎先生喜寿記念論集、真陽社、303-346
- 佐藤隆1999、「四天王寺の創建年代—土器・瓦の年代決定をめぐる—」『大阪の歴史と文化財』第3号、大阪市文化財協会、19-24
2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」『難波宮址の研究』第十一、大阪市文化財協会、253-265
2001、「難波宮東方官衙の再検討」『大阪市文化財協会研究紀要』第4号、149-160

- 2003、「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年—陶邑窯跡編年の再構築に向けて—」『大阪歴史博物館研究紀要』第2号、大阪市文化財協会、3-30
- 2014、「難波地域の土器編年からみた難波宮の造営年代」『難波宮と都城制』、吉川弘文館、78-99
- 白石太一郎2012、「前期難波宮整地層の土器の暦年代をめぐって」『大阪府立近つ飛鳥博物館 館報』16、3-24
- 中尾芳治1965、「難波宮遺跡における土器編年の問題」『難波宮址の研究』研究予察報告第五—二、難波宮址顕彰会、29-32
- 難波宮址顕彰会1965、『難波宮址の研究』研究予察報告第五—二
- 1976、「第66次発掘調査概報」『難波宮跡研究調査年報』1974
- 奈良県立橿原考古学研究所2011、『飛鳥京跡』Ⅳ
- 2012、『飛鳥京跡』Ⅴ
- 奈良国立文化財研究所1973、「坂田寺跡の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』3、5-9
- 1976、『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅰ
- 1980、『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅲ
- 1992、「飛鳥池遺跡の調査（飛鳥寺1991—1次調査）」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』22、84-114
- 1995a、『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅳ
- 1995b、「水落遺跡第7次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』25、77-88
- 1995c、「甘樫丘東麓の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』25、94-101
- 奈良文化財研究所2002、『山田寺発掘調査報告』
- 2007、「甘樫丘東麓遺跡の調査—第146次」『奈良文化財研究所紀要』2007、86-92
- 2009a、「甘樫丘東麓遺跡の調査—第151・157次」『奈良文化財研究所紀要』2009、68-75
- 2009b、「石神遺跡（第21次）の調査—第156次」『奈良文化財研究所紀要』2009、76-85
- 2010、「甘樫丘東麓遺跡の調査—第157・161次」『奈良文化財研究所紀要』2010、92-106
- 2012、「朝堂院朝庭の調査—第169次」『奈良文化財研究所紀要』2012、84-93
- 西口壽生・玉田芳英2001、「大官大寺下層土坑の出土土器」『奈良文化財研究所紀要』2001、26-29
- 西弘海1978、「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ、奈良国立文化財研究所、92-100
- 1980、「結語」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅲ、奈良国立文化財研究所、222-227
- 1982、(1974脱稿)、「土器様式の成立とその背景」小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会編『考古学論考』、平凡社、447-471（『土器様式の成立とその背景』、真陽社、1986に所収）
- 林部均1998、「伝承飛鳥板蓋宮跡出土土器の再検討」『橿原考古学研究所論集』第13、吉川弘文館、129-164（「伝承飛鳥板蓋宮跡の年代と宮名」『古代宮都形成過程の研究』、青木書店、2001に改稿して所収）
- 2013、「日本古代における王宮構造の変遷—とくに前期難波宮と飛鳥宮を中心として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第178集、開館30周年記念論文集Ⅰ、177-202
- 菱田哲郎2011、「古墳時代の実年代 後期・終末期の実年代」『古墳時代の考古学』Ⅰ 古墳時代の枠組み、同成社、222-230
- 深澤芳樹2002、「山田寺下層の土器について」『山田寺発掘調査報告』、奈良文化財研究所、540-547
- 湊哲夫2013、「前期難波宮跡の成立年代」『立命館大学考古学論集』Ⅵ 和田晴吾先生定年退職記念論集、立命館大学考古学論集刊行会、377-386
- 南秀雄1992、「難波宮下層遺跡の土器と集落」『難波宮址の研究』第九、大阪市文化財協会、320-339

Comparative Study of Two Ancient Capitals, Naniwa and Asuka Based on the Investigation of Pottery

SATO Takashi

In this paper, after introducing the results of the present chronological study of pottery in Naniwa and Asuka regions of the 7th century, the author considered in detail the parallel relation of pottery excavated in each region, and assumed calendar era. As a result, it was able to clarify which region's pottery was superior in terms of quality and quantity in each phase, and how the situation shifted. In Naniwa region, many good data of pottery have been obtained in the third quarter of the 7th century. The fact means the activities of people were prosperous in the region, and the development also extended to the outside of the palace area. On the other hand, in Asuka region there were few good data of pottery in the same period, and the region looks sluggish, different from the second quarter of the 7th century. On the contrary, pottery around the palace area in Naniwa region decreased sharply in the fourth quarter, and pottery in Asuka region rapidly increased. If the change of the region where the activities of people were the most brisk, namely the center of politics is shown by the transition of pottery in both areas, it will be an important clue for recognizing the different historical facts from the contents which were recorded in "the Chronicles of Japan".